**令和6年度第4回 仙台市若林区区民協働まちづくり事業評価委員会
議事録**

1 日時

令和7年3月19日（火） 14時00分～16時00分

2 会場

若林区役所4階第2会議室

3 出席者

(1) 評価委員

(2) 事業担当課

家庭健康課、区民生活課、まちづくり推進課

(3) 事務局

まちづくり推進課

4 傍聴者 なし

5 議題

令和6年度企画事業の事後評価について

6 配付資料

(1) 令和6年度企画事業実績概要報告

(2) その他関連資料、成果物

7 経過概要

(1) 開会

(2) 委員紹介

(3) 令和6年度企画事業実績概要報告

☞ 各課で事業ごとの写真等を投影しながら、実績概要報告書に基づきポイントを報告。その後、質疑応答・意見交換

(4) 閉会

委=評価委員

担=事業担当課

1 若林区健康づくり区民会議

2 若林区地域健康づくりちよいチャレンジ事業

担当：家庭健康課

委 生活習慣から運動、食事まで非常に活発な事業であるが、事業を実施する上で、根拠となるデータの収集はどのように行っているのか。

担 幼児の肥満や生活習慣に関しては、保健福祉センターで実施している幼児健診の間診票や体重等のデータを活用している。

委 小学生の肥満率が高いという説明があったが、小学生にも聞き取りやアンケート調査などを実施し、課題を示した上で寸劇を行うことで、説得力が増すのではないかと感じた。六郷の健康レシピの中身はどのような食材か。

担 過去に実施していた六郷健康づくり事業において、六郷地区で活動している地域団体等と連携し、地元の野菜（里芋や仙台白菜等）を活用した健康レシピを作成しており、今年度はそのレシピをこども食堂に提供したり、メニューにも取り入れていただいた。

委 大人、子どもともに肥満傾向にあるということだが、原因はどのように捉えているか。

担 アンケート調査を実施したことはないが、多くの方々と意見を交わす中で、朝食を菓子パンなどで済ませてしまうことが小さい頃からあるという話を沖野や六郷地域ではよく聞いたことがある。日常的に歩いたり、運動する方も少ないという話もあった。

委 親が子どもと買い物に行った時に甘い物を多く買ってあげたり、近くのスーパーでも車で行ってしまうなど、原因は多岐に渡りあると思うが、直接聞き取りを行い、その原因を情報提供することで、数年後には結果が出てくると思うので、是非、そういった取り組みも期待したい。親へのアプローチとしては、PTAの集りなどで募集しても、関心が高い方しか来ないことも考えられるので、就学時健康診断の際に講話をしたり、その時に興味深い資料を提出するなどして、関心を深めていって欲しい。

担 学校とのやり取りの中で、そのような場を検討していきたい。

委 健康づくりフェスティバルは毎年行っているのか。スポーツ団体は毎年関わっているのか。

担 毎年開催していて、スポーツ団体の方々には実行委員会に加わっていただき、一緒に企画、運営を行っている。

委 健康づくりフェスティバルのターゲットは誰か。

担 小さい子どもから高齢者まで幅広い世代が対象である。フェスティバルの内容は、体力測定などの他に、親子でも楽しめるようバルーンアート、輪投げのブースなどを設

置している。

委 毎年どれ位の方が参加するのか。

担 今年延べ 1300 人の方が来場した。

委 これまで経年的に取り組んできた事業であるが、数値向上の成果は把握しているか。

担 沖野地区は今年度から取り組んでいる地域であり、現状まだ数値として出てはいないが、昨年度まで重点的に取り組んでいた六郷地区では幼児の肥満傾向児の割合や大人のメタボリックシンドローム該当者の割合は事業開始前より改善傾向という結果がでている。

委 子どもの肥満が多いのは親の生活習慣と密接に関わっている。そのため、親の意識を変えることが重要であるが、その親に働きかける方法が一番の問題である。1つの解決策としては、企業を巻き込み保健指導を行う仕組みづくりである。食事を作る時間に余裕がない共稼ぎ世帯が多く、手軽でハイカロリーの食事に手を出しがちである。健康レシピを作成するにしても、簡単で手軽に作れる時短料理にするなどの工夫が必要である。令和7年度若林区まちづくり活動助成事業の1つに、子どもメニューのレシピ作成に取り組む団体もいるので、是非、連携を検討して欲しい。他県でも同じような検証から始まり、成果をあげている事例もあるので、情報を取り入れながら、事業を進めるのも方策の1つである。

3 若林区安全安心街づくり活動推進事業

担当：区民生活課

委 啓発グッズ作成費の支出科目は消耗品費か

担 消耗品費である。

委 防犯協会の方々が積極的かつ協力的であるからこそ、この活動が成り立っていると思うが、活動場所の割合が南材地区が多いように感じた。満遍ない地域への関わりが重要である一方で、熱意が高い地域に偏りが出てしまうことについて、どのように考えているか。

担 まず、南材地区を優先し、他の地域を疎かにしているということは全くない。「安全安心まちづくり推進協議会」では、若林区9つの連合町内会から1つのモデル地区を選定し、概ね2か年ずつモデル地区事業を実施しているが、現在では、若林地区でモデル事業を展開しており、他の地区にも力を注いでいる。また、区民協働まちづくり事業の報告の範囲外ではあるが、連坊地区や七郷地区に防犯グッズの提供をしている。報告書だけを見ると南材だけに偏っているように見えるかもしれないが、防犯協会への支援や相談体制の構築は常時行っている。

委 まちづくりパレードが平日の10時から11時の開催となると、参加できるメンバーが団体の構成員に限られてしまうのではないか。以前、中学校区の健全育成会の方々と、夏休み

の朝に部活がある子どもや親たちと駅前のゴミを拾ったり、電信柱のチラシを剥がしたりするような活動を行ったことがある。そのような団体と連携することも是非検討して欲しい。

委 防犯ステッカーは市民の目に触れるよう増やしていくべきものであるが、一枚3千円は高額である。サイズを小さくしたり、カラーコピーした物をラミネートし、後ろにマグネットテープを貼るなどして、1枚あたりの単価を削減するなどの取り組みを検討すべき。

委 令和6年12月末時点における、若林区の刑法犯認知件数が前年同期比で減少していて、累計件数も仙台市内5区の中で最も少なかったと報告があるが、青葉区と若林区では人口も異なるので、人口比率でも比較するべきである。

委 様々な防犯の取り組みをされているが、重要なことは防犯意識が高い地域だと思わせることである。そのためには、例えば、防犯パトロールをする際に着るベストを町内会の役員などに配布し、買い物に行く時や散歩する時など、常時ベストを着てもらっただけで抑止力になる。もちろん、キャンペーン期間として啓発をすることも大事だが、普段から地域の住民が防犯活動を行っていることを知らしめ、協力者を増やしていくような活動を検討していただきたい。

4 若林区民ふるさとまつり

担当：若林区まちづくり推進課

委 弟子入り体験教室の参加団体が1団体のみということだが、どのような団体か。

担 工房けやきという団体で、木工体験として木の車作り体験を行った。

委 若林区のまちづくり活動助成団体や今回参加した学生など、様々な関わりを組み合わせることで、新しいまちづくりに挑戦しようという機運が高まる可能性もあるので、是非、ネットワーク作りにも取り組んでいただきたい。

担 今年度、若林区のまちづくり活動助成団体に採択された「東北パフォーマンスネットワーク」にはまつりへの参加調整をしていたが、スペースの問題等で実現できなかった。引き続き、地域のまちづくり団体への声かけは行っていきたい。

委 若林区には4つの工業団地があるが、若林区への関わりが少ないのが気になっていた。燕三条市で工場の祭典というイベントを行っているが、約200社の企業が参加し、自由なものづくりの現場が見学できる。町全体で取り組むイベントであり、約1週間開催している。企業側からすると、自分たちの働く場所をアピールできる効果もあり、別の視点で新たな関係者を巻き込むことで、協力関係を構築できる可能性がある。

5 地域メディアの活用による<新しい地縁>創造プロジェクト（ラジオはいらいん若林） 担当：まちづくり推進課

委 時代とともに発信媒体の主流がラジオから映像へ変化している中で、市政情報も YouTube など配信されている。高齢者でも YouTube を見ている方も多く、映像は効果的に伝えられる方法の1つであるが、今後の方針等をお聞かせ願いたい。

担 ラジオはいらいんは、長年、若林区に所在地がある「ラジオ3」の協力を得ながら番組制作、放送している事業である。映像媒体への検討は、評価委員会からの意見として、まちづくり協議会にも報告したい。

委 本事業の認知度や視聴率について把握しているか。

担 一般的にラジオの視聴率は1%と言われていて、仙台市の1%となると約数千人と捉えているが、実際にはもっと少ないと思うので、アーカイブ配信で少しでも多くの人が聞けるようにした。

委 災害時にラジオ3で災害情報を配信することはできるのか。

担 東日本大震災の際も、ラジオ3の枠を使って、災害情報を配信した。

委 ラジオを聞ける環境を作ることが大事である。各町内会の防災セットにはラジオが予め準備されていても、電池が切れていたりすることもあるので、スマートフォンのアプリでも聞けることを広くしらしめるなど、制作だけでなく認知してもらう活動も必要である。

6 合唱のつどい 担当：まちづくり推進課

委 今、参加している団体は合唱団体のみか。

担 合唱のみである。

委 実績報告書に多様な団体の交流の場にしていきたいと記載されているが、合唱だけでなく他の分野も交えた交流を考えているということか。具体的なイメージを教えて欲しい。

担 まず、合唱の参加団体が減少している要因分析として、コロナの影響で合唱団体が半分になったと言われており、区内の市民センター等で活動している合唱サークルがかなり減っているという現状も把握している。その上で、例えば、吹奏楽やダンスパフォーマンス、ファッションショーなど、他の分野も一同に集まる文化的な事業案を考えている。

委 その案は、各グループ団体が別々に発表するのではなく、コラボして実施するのか。

担 そのとおり。但し、元々若林区は合唱が盛んな地域で、若林合唱連盟も30年間合唱の集いを続けてきたので、合唱で若林を盛り上げていきたいという強い思いがある。

一方で、コロナ禍を経て合唱人口が減り、高齢化も進んできている中で縮小も進み、再構築の必要性を感じ始めているところである。新しい団体との交流については、急に進めるのは難しいため、母体であるまちづくり協議会とも協議しながら前に進んでいきたい。

7 広瀬川灯ろう流し「光と水とコンサートの夕べ」

担当：まちづくり推進課

委 新しく設置した応援観覧席が 1,000 円で非常に安かったが、どれくらい好評だったのか。

担 満席では無かったが、7,8 割は埋まっていた。主催者側も初めての試みだったので、悩みながら価格を設定した印象がある。

委 クラウドファンディングは実行委員会が行ったのか。区役所が行ったのか。

担 実行委員会が行った。

委 若林区まちづくり活動助成でもまちづくりの団体に助成をしているが、助成後の資金調達の 1 つとしてクラウドファンディングを活用すれば、資金の集まり方が違ってくる。ノウハウを地域の団体に教えていただきたい。

8 若林区魅力発信事業（若林わくドキまち歩き）

担当：まちづくり推進課

委 去年は 4 月に第 1 回を開催していたが、今年も 4 月に開催するのか。

担 4 月は桜の見ごろの時期で、若林は特にお寺と桜のコラボレーションが素晴らしいため、毎年 4 月に開催している。次年度の報告にはなるが、今回 178 名の応募があり、過去最高の応募であった。そうすると、倍率が 10 倍近くになるので、回数を増やしたり、若林区に住んでいる方に限定するなどの検討が必要である。元々は若林区在住の方に魅力を知ってもらうために始めた事業だが、回数を重ね、ある程度認知されてきた中で、今は対象範囲を全区に広げ、抽選で公平に参加者を決めている。2 回に増やすことも検討したがスタッフの負担が大きくなることを懸念している。

委 ガイドの謝礼は 3 回とも同じ金額か。

担 第 1 回は謝礼をお支払いしたが、第 2 回はスタッフ、第 3 回は各施設の方々に説明をお願いしたため、令和 6 年度は第 1 回のみお支払いをした。

委 申込者のばらつきがある原因は把握しているのか。

担 テーマやコースの設定で参加者のばらつきが出るのは理解している。第 3 回は震災をテーマにしたが、気軽に参加できるテーマではなかったため、内容を見て申込みされていると感じている。

- 委 4月の企画は応募が多いと分かっているのであれば、参加費を上げるなどの考えはな
いか。
- 担 企画会議で参加費の増額について検討したが、これまで500円で開催してきたこと、
高く設定してしまうことで、応募者が少なくなり、若林区の魅力を知ってもらうとい
うコンセプトとずれてしまうという意見があった。
- 委 そもそも、現時点で体験できる人が限られているのは問題である。参加者の決定はど
のように行うのか。
- 担 申込フォームでの申込については、システムでランダムに抽出することができる。は
がきの応募は、名前が見えないようにはがきを箱に入れて、スタッフが無作為に選ん
でいる。
- 委 講師が同じ人に偏らなければ、同日に時間をずらして開催することもできるのではな
いか。良い企画なので、是非、多くの人に参加できる方法を検討して欲しい。
- 担 スタッフも高齢化が進んでいることに加え、事故を起こさないよう、神経を使いなが
ら歩いているので、1日に2回開催するのは現状難しい。スタッフも長く若林区に住
んでいる方々が多く、ガイドさんの説明以外にもこぼれ話をしていただくこともあり、
ベテランのスタッフならではの事業として成り立っているところもある。
- 委 若林区まちづくり活動助成で助成していた「連坊オモシロ街歩き」も西大立目祥子氏
にガイドをお願いし、まち歩きを行っているが、そのような団体と連携することで、
スタッフの負担軽減や複数開催も実施できるかもしれない。
- 担 若林区の魅力を発信したいという思いは共通なので、是非、検討していきたい。

委員長総評

コロナ禍が終わり、ロシアウクライナ戦争が始まるなど、世の中では様々なことが起き
ている。また、デジタル化の波により、どこにいても仕事ができるような環境になっ
てきている。そのような、世の中の環境変化の影響で、人々はより居心地の良い場所にや
はり移り住んでいく傾向にある。その居心地の良い地域が若林区であって欲しいと思
うが、そのためには、従来の概念を変えていかなければならない。現実を直視し、新た
な価値観を創出することが重要である。暮らす町が、市民協働、多文化共生など、どう
あるべきかということを考えていかなければならない。今は時代の大きな変わり目
であるが、暮らしやすい町を目指す、最前線の事業こそが、市民協働のまちづくり
事業である。今回の各評価委員からの意見、指摘を受け、次年度に向けて準備を進
めていきたい。